

【人権教育をめぐる動向】その2 「権利」 = 「正しい」ということ

前回(vol.1)は「世界人権宣言」をテーマにしましたが、今回は改めて「そもそも権利とは何か」という点について、少々長くなりますが、**高校の教科書**『高校政治・経済』（実教出版）の「第1章 民主政治の基本原理」「第1節 人権の世紀」の記述を紹介しながら確認しておきたいと思います。

「権利」と“Right”

【実際の教科書本文は白黒です】

「人権」は、英語でいえば、“Human Rights”の訳語である。しかし、「人権」と“Human Rights”が、本当に同じ意味かという点、どうも両者にはかなりのへだたりがあるように感じられる。その原因は、そもそも、英語でいう“right”に「権利」という訳語をあてたことにありそうである。

“Right”という英語の言葉のもつ意味と「権利」という日本語の言葉のもつ意味は、語感的には相当ずれがある。そして、このことが、じつは、日本における「権利」あるいは「人権」に対する人々の意識に、微妙に影響を与えていると考えられるのである。

英語の“right”という言葉には、「権利」のほかに「正しい」という意味がある。「ほかに」というのは、じつは正確ではない。日本語では「権利」と「正しい」という別の意味を与えられているが、英語の“right”という言葉がもともと2つのちがった意味をもっていたわけではない。

“Right”の本来の意味は「正しい」という意味である。だから、日本語で「権利」と訳されている“right”とは、本来は、「正しいこと」という意味なのである。Right (権利) は right (正しい) だから right (権利) なのである。これが“right”という言葉の、そもそもの意味である。

ところが、日本語の「権利」という言葉には、「正しい」という意味は含まれていない。逆に、「権」という言葉は「力」(power) という意味を含んでいるから、「権利」は、自分の利益を力づくでおし通すといったニュアンスをもつ。だから、「権利ばかりを主張するのは問題だ」といわれたりする。しかし、この命題の「権利」を“right”におきかえてみれば、それが成り立ちえない命題であることがすぐにわかる。「right (正しいこと) ばかりを主張する」のに何の問題もないはずだからである。

人間として正しいこと

「権利」は英語で言う right の訳語であるから、その本来の意味は、「正しいこと」という意味である。したがって、「人権」つまり“Human Rights”とは、「人間として正しいこと」という意味になる。この、“Human Rights”の本来の意味は——日本語の「人権」という言葉にはそういう意味が含まれていないだけに——、つねに意識されなければならない。

このことが意識されていれば、人権侵害は、「人間として不正なこと」つまり人間としてしてはならないことだということが、容易に理解されるであろう。逆に、また、人権の主張は、それが「人権」だから（憲法に書かれてあるから）というのでなく、「人間として正しいこと」だという主張でなければならない、ということ、つまり、権利を主張する者は「正しさ」を弁証する責任がある、ということも、理解されるであろう。

この場合、何が「人間として正しいこと」かは、人によって判断がわかることも多いであろう。それぞれの人の価値観、人生観、世界観によって、「正しさ」の判断基準は当然ちがってくると思われるからである。しかし、そうであるからこそ、それぞれの人の異なった価値観、人生観、世界観を正面からぶつけ合うことが必要となる。そして、そのことを通じて、「正しさ」についての社会的コンセンサスが形成されてはじめて、本当の意味で日本社会に人権価値が根づくこととなるはずである。

何事も基本を大切にしながら取組みたいものです。「正しいこと」の実現に向けた実践として人権教育があるということを常に確認しながら取組みたいと考えています。